

【論文】

病翁小林虎三郎の病気と病状の分析

—日本近代化と「米百俵」の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（IV）—

信州大学 坂本 保富

はじめに

美談「米百俵」の主人公である小林虎三郎（1828-1877）の生涯において、最大の難敵は病魔であった。彼の闘病生活は長く、幕末安政期の20代後半から明治10年に享年50で他界するまで、実に20数年もの長い間、不治の病と対峙し苦悩した。だが彼は、過酷な闘病生活の後半生において、耐え難い苦痛に苛まれながら、なおも明治維新後の日本近代化に関わる様々な活動を精力的に展開した。その姿は、彼の病歴を知るとき、奇蹟とさえ思える。歴史に「もし」はない。だが、もしも彼が健全な身体に恵まれていたならば、恩師象山の期待に違わぬ学究活動を展開して、同門畏友の吉田松陰（1830-1859）を凌ぐほどの歴史的役割を、幕末維新の激動期に担うことができたかもしれない。無念にも、それを病魔が妨げた。そのことを誰よりも悔やんだのは、虎三郎自身ではなかったか。安政期以降に執筆した彼の漢詩や書簡には、必ずといってよいほど病気や病状についての記載がある。そこには、病苦に耐えかねた呻き^{うめ}の声と共に、思うにまもらない無念の思いが滲み出ている。まさに、彼の後半生は病魔との戦いであった。しかし、不治の難病には挫けなかった。彼は、強靱な精神力と使命感をもって踏ん張り、恩師象山の学問思想を継承し具体化する様々な活動を展開し、日本近代化に関わる貴重な歴史的遺産をいくつも遺して、50年の一期を閉じた。

いったい、虎三郎を苦しめた病気とは何であったのか、いつ発症したのか、どのような症状であったのか。彼の病気や病状についての疑問は尽きない。この点が、これまでの「米百俵」研究や主人公である虎三郎研究では、全くの盲点であった。彼が背負った長く

苦しい病魔との戦いに照射したとき、虎三郎の活動や生涯は、いったい、どのように見えてくるのか。日本近代化を見据えて必死に生きた彼の生涯とその歴史的な功績が、さらに一步深く追体験的に理解され再評価されるのではないか。過酷な闘病生活の中で、彼の日本近代化に貢献する学究的生涯は展開された。この厳粛な事実を看過して、美談「米百俵」を初めとする彼の思想と行動の軌跡を真に理解することはできない。

それ故、本稿に課せられた研究課題は、虎三郎に関する諸史料を吟味して、彼の病気や病状に関する記述を時系列で抽出し、その内容分析を通して闘病生活の実態を明らかにすることである。

(一) 自らを「病翁」と改名した後半生

(1) 幼児期における難病の洗礼とその後遺症

虎三郎は、百石取りの越後長岡藩の家臣小林又兵衛（誠齋または厳松、不詳-1832）の家に、七男二女の三男として生まれた。長男と次男は相次いで天然痘にかかり、幼くして夭逝してしまった。それ故に、三男である虎三郎が、小林家の家督を継ぐ羽目となった。だが、実は虎三郎もまた、兄たちと同じく幼児期に天然痘を患い、生死を彷徨ったのである。

天然痘（痘瘡）とは、ウイルス性（天然痘ウイルス）の感染症である⁽¹⁾。感染力、罹患率、致命率の非常に高い疫病として恐れられた。症状は、急激に40℃前後の高熱を発し、悪寒、頭痛、四肢痛、腰痛などではじまり、吐き気、嘔吐、意識障害などを引き起こす。さらには、呼吸器や消化器などの内臓疾患を発症し、肺の損傷による呼吸不全を引き起こし、死に至る場合も決してまれではなかった。たとえ治癒した場合でも、皮膚に癬痕（ケロイド）を残す場合が多い。現代では、医学が進歩して天然痘の予防法や対症療法が確立し、WHO（世界保健機関）は1980年に天然痘の世界根絶宣言を行った。しかし虎三郎の場合は、今から180年も前の江戸時代のことで、為す術がなく生死に係わる難病であった⁽²⁾。

幸いにも虎三郎は、一命を取りとめた。だが、天然痘に特有の後遺症が残った。顔面の

痘痕（あばた）と左眼の失明である。この過酷な後遺症が、その後の彼の人生に重くのしかかり、彼が被った精神的な苦痛は如何ばかりであったか。それは、生涯、妻帯しなかったという一事をもってしても、十分に推察することができるであろう。

幼くして天然痘に罹災した虎三郎は、幼少時から過酷な後遺症を背負って生きなければならなかった。しかも成人後には、幼児期の天然痘が病因と思われる皮膚病や内臓疾患を次々と発症し、心身共に苛まれ続けたのである。まさに虎三郎の人生は、「米百俵」の美談からはとても想像できない壮絶なもので、それは難病と共に始まり、闘病生活に明け暮れた悲運の半世紀であった。

（2）病軀に懊悩する晩年に「病翁」と改名

虎三郎は、不治の病に苦悩する自分自身を「病翁」（病気の老人）と号した。いったい、それはいつからであったのか。彼が使用した号は、時代と共に幾度も変わっている。幕末期の嘉永安政年間には「雙松樵人」（二本の松と木こり）、「雙松迂夫」（二本の松と世間に疎い男）、「雙松外史」（二本の松と在野の歴史家）、「子文」（詩文の著述家）、慶応年間には「雙松」の他に「炳文」（明るく光り輝く文）とも号した。虎三郎が、自らの号に「松」や「樵人」「迂夫」などの文字を好んで用いたことは、剛毅木訥で誠実一路の彼自身の性格と、権力や時流に迎合しない清廉潔癖な生き方を見事に表現している。彼は、江戸遊学中に遭遇したペリー米国艦隊の浦賀来港に関わって青春の蹉跌を踏み、若くして学問的大成や立身出世への道を絶たれた。孤高な松や寡黙に生きる樵夫、あるいは沈思黙考する歴史家や文人に自らをなぞらえる虎三郎の心境は、はたして如何なるものであったのか。

だが、明治と改元される前年の慶応3年（1867）には、「寒翠」（寒々とした緑色）あるいは「病叟」（病気の老人）と変わり、初めて「病」という文字を号の中に取り入れる。その後の彼が、最期まで用いた号が「病翁」であった。「病翁」と「病叟」は同じ意味である。「病翁」という号は、不惑を過ぎてなお、不治の難病と対峙して病軀を生きなければならなかった彼自身の後半生を、端的に表現している。

ところで、「病翁」という号の使用が、彼の遺稿集『求志洞遺稿』に収められた史料の中で最初に確認できるのは、彼が編輯刊行した歴史教科書『小学国史』（全12冊）の第1

冊（明治6年4月刊）に記された「病翁小林虎編輯⁽³⁾」（下線は筆者、以下も同様）である。彼の代表作のひとつである『小学国史』は、戊辰戦後の長岡復興に際して生まれた美談「米百俵」の後に上京し、それから2年後に公刊された作品である。さらに彼は、その翌年の明治7年（1874）には、中国近代化に関する漢書を入手して翻刻し、明治初期の日本に紹介する『德国学校論略』（上下2冊）という作品を刊行する。彼は、同書の序文「翻刊德国学校論略序」の末尾にも、「紀元二千五百三十四年、七月下澣。越後 病翁小林虎、東京居る所の求志楼に撰す。⁽⁴⁾」と、自らを「病翁小林虎」と記している。これらの史料によって、すでに明治6年（1873）には、彼が「病翁」と号していたことが明らかとなる。

だが、山本有三『米百俵』の「そえがき」には、虎三郎が実弟の土佐行きに同行して高知に滞在していた明治5年（1872）当時の史料が引用され、そこには「文政十一 戊子 八月十八日 又兵衛三男 小林病翁 壬申 年四十五 高知県官舎寄留⁽⁵⁾」と記されている。これは、彼が、本籍地である越後長岡の役所に届け出た史料とのことである。ということは、明治4年（1871）に戸籍法が制定され、翌5年に作成された全国戸籍、いわゆる「壬申戸籍」に登録するために提出された、彼の正式な氏名が「小林病翁」であったのではないかと推察される。有三が引用した史料は、前述の『小学国史』や「翻刊德国学校論略序」に先行する明治5年（1872）のものである。さすれば、この史料が、「病翁」と号した最初の史料となる。しかも「病翁」とは、単なる私的な「号」ではなく、戸籍に登録する公的な「実名」であったということになる。このことは、別の史料（上京当時の明治4年7月付書簡）に、「小生近日病翁と改名致し候⁽⁶⁾」と記されていることからみても確かなこととみてよいであろう。

以上の諸史料を総合的に勘案すると、虎三郎は、廃藩置県の直後に長岡藩の公職を辞して上京する明治4年8月の時点で、すでに「病翁」と改名していたとみてよい。しかも、「病翁」が単なる号ではなく、戸籍に記載される正式な氏名であったとすれば、それは大変な驚きである。しかしながら、「病翁小林虎三郎」を「小林病翁」と表記することは、別段、不思議なことではない。恩師の「象山佐久間修理」が「佐久間象山」と呼ばれ、同門畏友の「松蔭吉田寅次郎」が「吉田松陰」と記されたのと同様である。それにしても、「病翁」とは、不治の難病を背負って病軀に苦悩しながら、天命を覚知し天寿を全うしようと必死に生きた、晩年の虎三郎を表現する名前としては、実に言いえて妙である。

(二) 著書等に記載された病気と病状

(1) 処女論文「興学私議」に記された病状

虎三郎が恩師の佐久間象山に提出した処女論文「興学私議」の末尾には、「安政六年己未孟春、疾を力めて草を求志洞に属す、雙松迂夫虎⁽⁷⁾」と記載されていた。管見の限りでは、これが年月が記載された関係史料の中で最初に確認できる病状記録である。安政6年(1859)の春といえば、虎三郎が江戸の象山塾を辞し、郷里長岡に塾居してから5年目の春のこと、数えて31歳を迎える年であった。これによって、彼が自らの教育立国思想を表明した論文「興学私議」は、病苦の中で書かれた最初の作品であったことが判明する。

(2) 歴史教科書『小学国史』に記された病状

・史料①：虎三郎執筆「小学国史序」(明治6、1873年)

小学校の歴史教科書『小学国史』は、虎三郎が高知から東京に戻った後、46歳を迎える明治6年(1873)に刊行が開始され、翌7年に最後の第12巻が出て完了した。それは、日本の教育近代化に関わる彼の代表的な作品の一つである。虎三郎が執筆した「小学国史序⁽⁸⁾」には、不治の難病で苦しみながら関係資料を閲読して編輯したことが、次のように記されていた。労作『小学国史』もまた、難病と対峙しながら執筆された作品であったのである。

養病之余	痾 ^あ を養ふの余り
閱諸史	諸史を閲して
採其要	其の要を採り
悉以国文綴輯	悉く国文を以て綴 ^{てしゅう} 輯す

〈意訳〉

難病を療養する傍ら、多くの歴史書を読み、その要点を採り、すべてを国文で綴

り編集した。

・史料②：中村正直の推薦序文「小学国史序」（明治6、1873年）

虎三郎が編輯した『小学国史』の第1巻（明治6年4月刊）には、恩師象山の知己であった中村正直（1832-1891）の序文が付されていた。中村は、福沢諭吉を凌駕するほど英学に精通した明治の啓蒙思想家であり、また当時の漢学界を代表する漢学者でもあった。その彼の『小学国史』を推薦する序文は、明治6年（1873）5月に執筆されたもので、虎三郎が46歳のときであった。それは、他人からみた虎三郎の病気や病状が記された数少ない貴重な史料である。

余始めて炳文に見える。年四十なるべし。面貌は瘦て黒し。自ら言ふ、久しく風湿を患うと。悠忽日を渡り、一として成す所無く、意わず今此編の出ずるを見るなり。斯くして炳文の病榻にありて痛苦を忘れて著述を樂めるを知れり⁽⁹⁾

この中村の序文には、彼が虎三郎に面会したときの病名が「風湿」と記されている。虎三郎の病名が記された最初の史料とみてよい。ところで、「風湿」とは漢方医学の病名で、「風と湿によって起る病のこと。リウマチ。」と説明されている⁽¹⁰⁾。西洋医学でいう「リウマチ」（リウマチ、rheumatism）とは、古代医学においては「悪い液が脳から身体各部に流れていき、痛みを起こす病⁽¹¹⁾」とみられていたが、現代でも「間接、骨、筋肉、腱、靭帯などの運動器が痛んだり、強ばったりする病気」（リウマチ性疾患）とよばれている。症状は、いわゆるリウマチ熱によって関節炎が惹起され、膝関節や股関節、足首や手首、肘や肩など大きな四肢間接が次々に腫れて痛み、可動域の制限や変形が起きる。また、心臓の弁膜や筋肉も侵され、輪状紅斑や皮下結節などの皮膚症状も顕れ、鼻出血、胸痛、腹痛などの様々な症状を伴う病気である⁽¹²⁾。罹患すると食欲不振になり、全身の疲労感や倦怠感に襲われ、顔色も悪くなって体全体の抵抗力が弱まり、気候や環境変化にも対応できなくなるといわれる。虎三郎は、このような耐え難い病状の数々を呈する難病と向き合いながら、幕末維新期の日本近代化に関わる学術的活動を展開し、歴史教科書『小学国史』をはじめとする様々な作品を遺したのである。

(3) 小金井権三郎著「小林寒翁略伝」に記された病状

虎三郎の没後に彼の生涯を綴った最初の伝記は、彼の遺稿集『求志洞遺稿』に収録された「小林寒翁略伝」(明治26年8月、1893年)である。著者は、遺稿集を編集した甥の小金井権三郎(1855-1925)。彼は、東京大学医学部教授であった実弟の良精(1858-1944)と共に伯父・虎三郎の関係史料を蒐集して編纂し、十七回忌を記念して公刊した。彼ら兄弟は、虎三郎が美談「米百俵」の誕生後の明治4年(1871)に上京し、明治10年(1877)に他界する晩年まで、共に東京にあつて身近で虎三郎に接し、進路その他の相談に親しく与っていた。その権三郎が著した伯父・虎三郎についての略伝は、内容的にも信憑性が高く、特に病気や病状についての記述は、医学者である実弟と共に遺稿集を編集しているの、最新の医学的知見に裏付けされた内容とみてよい。次に、略伝に記された虎三郎の病気や病状に関する記述を抜粋して吟味したい。

・史料「小林寒翁略伝」①

翁の郷に帰るや、門を閉じて閉居す。幾ばくもなくして病を發し、頗る難治の症に罹る。爾来百事を抛却し、唯薬炉と相親しむのみ。病間図書を左右にし、詩文を作為し、独り世態を慷慨するのみ。 (13)

虎三郎は、ペリー来航時に師説を奉じて横浜開港説を藩主や幕府に上書して処罰された。数えて27歳を迎える安政元年(1854)の春、夢破れて江戸の象山塾を去り、長岡に帰省して謹慎生活に入った。その直後に、虎三郎は難病を発症したこと、以来、自宅に籠もって服薬・療養の生活を続けたこと、そして幕末動乱期の政治状況を憂慮しながら文筆生活に終始せざるをえなかったこと、等々の事実が明らかとなる。これによって、彼が難病を発病したのは20代後半、30歳を迎える前とみてよいであろう。

・史料「小林寒翁略伝」②

長岡藩中、翁と名声を馳する者、^{うどの}鵜殿団次郎・河井継之助・川島億二郎等あり。鵜殿は幕下^{ばっか}に徴されて目付役と為り、勝安房等と共に幕議^{あずか}に与る。故を以て常は藩に在らず。河井、川島、翁と共に藩政を議し、^{たがい}迭に其の論を上下す。然れども翁は多く病床に在るを以て、持論を施行すること能はず。川島も亦翁と意を同じうす。独り河井のみ之に反す。且才弁衆を服するを以て、遂に顯職に昇り、藩政を掌握す。官軍越に臨むに方り、藩師方針を誤る者は皆河井の意に出づ。多く壯士を亡ひ、其の身も亦戦没す。慨せざるべけんや。是の時に方り翁屢々河井の失政を論ず。然れども病に臥して其の説を達する能はず。徒に天を仰いで浩嘆するのみ。蓋し河井の藩政を執るや、権力一時盛んなりと雖も、学力道徳に至つては、翁に及ばざること遠し。故を以て平素翁を忌避して其の説を用ひず。翁も亦其の論の容れられざるを知り、敢えて藩政に与らず、王政復古の日に至る。唯病を養ひて一室に閉居するのみ。⁽¹⁴⁾

上記の資料は、虎三郎が江戸遊学から帰藩した後、長岡の自宅に謹慎してから戊辰戦争の敗戦に至る迄の10数年間、すなわち幕末維新期の長岡藩の動向を描写している。当時、長岡藩政を担うる人材としては、鵜殿団次郎(1831-1868)、河井継之助(1827-1868)、川島億二郎(1825-1892)、そして虎三郎の4名が挙げられている。だが、鵜殿は虎三郎と入れ替わりで江戸に遊学し、洋学(数学、天文、航海、測量など)を修めて才能を発揮し、文久2年(1862)、幕府に徴され蕃書調所教授に抜擢された。さらに彼は中央で立身出世を遂げ、戊辰戦争が勃発する前年の慶応3年(1867)には幕府の目付役という重職に就く。したがって彼は、長岡藩からは離れていたのである。

残る人物はといえば、河井と三島、虎三郎の3人で、彼らはいずれも象山門人であった。だが、虎三郎と三島は、常に河井と意見を異にし、特に戊辰戦争を巡っては対立した。病床に伏しがちの虎三郎は、河井の施策を叱正するが、聞き入れられず、無念の思いを抱きながら自宅に籠もって療養生活を送るしかなかった。河井の方はといえば、慶応2年には家老に昇進し、同4年には軍事総督に就任、戊辰戦争の最高指揮官となる。しかし、結果は敗戦、河井も戦傷で他界した。

戊辰の戦後、長岡復興を担わされたのは、病身の虎三郎と畏友の億二郎であった。上記の史料によって、虎三郎は、江戸の象山塾から長岡に帰藩し、謹慎生活に入った

20代後半の安政時代には難病を発症しており、以後、病軀に懊悩して持てる才能を発揮できずに明治維新を迎えたい、という厳しい状況を理解することができる。

・史料「小林寒翁略伝」③

明治二年、藩主牧野忠毅君、翁を起して政に与らしむ。川島及び同志の諸士、荐りに職に就かんことを勧む。翁已むを得ず、遂に疾を力めて之に応ず。以て藩の大参事に任ず。常に家に在りて文武の政務を統督す。尋いで朝廷翁を徴して文部省の博士に挙ぐ。翁病を以て之を辞す。蓋し朝臣中に翁を知る者ありて之を薦挙すればなり。⁽¹⁵⁾

戊辰戦後の長岡復興に際して、難病に苦しむ虎三郎ではあったが、藩主や畏友の三島億二郎を初めとする藩内諸氏の強い懇願を受け、大参事（旧家老職）という要職に就任する。だが、病床に伏しがちな虎三郎は、億二郎のように東奔西走できず、専ら自宅にあつて復興政策の計画立案などの職務を遂行するしかなかった。また、時を同じくして、象山門下の知人の推挙があつて、維新政府からも文教政策を担当する文部省の要職への就任を要請された。が、こちらの方は、病気を理由に辞退している。

彼は、戊辰戦後の長岡復興を要請されて藩の要職に就き、復興の基盤としての人材育成を重視し、学校の新設に尽力する。だが、美談「米百俵」の誕生する明治初年の頃、虎三郎の病状はかなりの重症で、外出もままならない状態にあつたことを窺い知ることができる。

・史料「小林寒翁略伝」④

明治四年の秋、病少し緩むを以て、東京に到る。安政元年罪を得て国に退いてより、已に十八年を過ぐ。（中略）十年七月。伊香保に抵り温泉に浴す。居ること数旬。俄然として発熱。頗る劇症なり。八月二十四日。昇されて寓に帰る。未だ一点鐘（30分毎に打つ時刻を知らせる鐘）。溘焉として逝く。享年五十歳。^(ママ)翁多病なるを以て終身娶らず。故に子無し。翁、兄二人あり、夭す。翁三男を以て家を継ぐ。翁の次は貞四郎、則ち家を継ぐ。⁽¹⁶⁾

美談「米百俵」の翌年に実施された廃藩置県を契機に、病氣療養を理由に藩の公職を辞した虎三郎は、病状も小康状態に向かったので、18年ぶりに江戸、改まった東京に上り、実弟宅に寓居する。だが、それからの虎三郎は、病魔を振り払うかのごとく、矢継ぎ早に日本近代化に関わる著作物を刊行していく。この最晩年の東京における数年間は、闘病生活に終始した彼の人生の中で、閃光のような光彩を放った輝きの一瞬であった。だが、燃え尽きるときは容赦なく訪れた。明治10年(1877)7月、彼は群馬県の伊香保温泉に療養に出掛けるが、翌月、俄に発熱して病状は急変する。急ぎ東京の寓居に戻ったが、その直後に逝去する。50年の一期をもって、彼は病魔との長い戦いの人生から解放された。

思えば虎三郎の人生は、生死を彷徨う難病との遭遇からはじまった。幼児期に天然痘に罹り、一命は取り留めたものの左眼を失明し、顔面には醜い痘痕が残った。この身体的な後遺症が、彼に与えた精神的な苦痛は如何ばかりであったか、想像を絶するものがある。「翁多病なるを以て終身娶らず」と記されているように、彼は、終生、独り身を通した。しかも、美談「米百俵」の後に上京して以来、再び郷里の越後長岡の山河にまみえることはなかった。それ故に、長岡の小林家を相続したのは、次弟である4男の貞四郎であった。

(三) 漢詩に詠じられた病状の数々

(1) 幕末期三十代の漢詩に記された病状

・漢詩史料①「雲洞に答ふ」(幕末安政期)

虎三郎が、江戸遊学から郷里長岡に帰り、謹慎生活に入ったのは安政元年(1854)の春であった。次の漢詩には「久しく病んで」とあるが、自宅謹慎後の安政年間に詠まれた作品と推定される⁽¹⁷⁾。早くも20代の末期には難病を発症して、何事にも熱中できず、地方に埋もれて無為の日々を送っているという、孤独な心境が吐露されている。

久病無聊興趣空	久しく病んで聊か興趣無く空し
喜君千里寄詩筒	君が千里詩筒を寄せるを喜ぶ
想得山村寒夜雨	想ひ得たり山村寒夜の雨
一樽芳酒話英雄	一樽の芳酒英雄に話をす

〈意識〉

長く病に冒され、退屈して何の興味も湧いてこない。遠方から貴方が手紙をくれ嬉しかった。山村の寒い夜の雨を想い、一樽の美酒を飲みながら英雄と語り合っている。

・漢詩史料②「柳士健に寄す」（幕末安政期）

この漢詩も、前作と同じ謹慎中の安政年間に詠まれた作品と推察される。「多年病に臥し」とあるが、すでにこの時点で虎三郎の病気は長期に及び、回復の見込みがないまま、世間と隔絶して暮らす孤独な心境が胸を打つ作品である⁽¹⁸⁾。

多年臥病鎖茅衡	多年病に臥し茅衡を鎖す
似与風光便隔生	風光の便と生を隔つに似たり
淡煙疎雨江村暮	淡煙疎雨江村の暮
羨汝醉吟忘世情	汝が酔吟世情を忘るるを羨む

〈意識〉

長年、病気で床に伏し、門戸を鎖して引き籠もっている。自然の風光とは隔絶したような人生である。薄霧の中をそぼ降る雨に包まれ、川辺の村は暮れる。酔って詩を吟じ世情を忘れることのできる貴方が羨ましい。

・漢詩史料③「蓐に臥す」（幕末安政期）

次に紹介する「臥蓐」という漢詩は、虎三郎が30歳前後の安政年間の作品と推定される⁽¹⁹⁾。江戸遊学中の虎三郎は、象山塾にあって黒船来港という歴史的な大事件に

遭遇した。このとき彼は、幕府の老中職にあった藩主や幕閣に対して、恐れ多くも師説を奉じて横浜開港を建言した。その結果、譴責処分を受けて地元長岡での謹慎処分を受け、学問大成への道を絶たれる。この漢詩は、黒船来港の翌年（安政元年、1854）の春、恩師象山に別れを告げて越後長岡に帰り、自宅に謹慎して処女論文「興学私議」を執筆する前後の作品と思われる。

作品中に「慈父六十髮将に雪ならんとす」と、還暦を迎える年老いた父親のことが詠まれている。虎三郎の父の誠齋は、安政6年（1859）2月に病没する。虎三郎が論文「興学私議」（安政6、1859年春）を執筆する頃のことであった。さすれば、この漢詩が詠まれたのは、長岡に帰省した安政元年から父親が他界する同6年2月までの間で、彼が30代中頃の作品と推察される。

当時の虎三郎は、すでに難病を発症してから10年近くもの歳月が流れ、依然として病床に伏す苦悩の日々を送っていた。安政元年に郷里長岡に戻って謹慎した直後に発症した難病は癒えず、逆に病状は急速に悪化していった。「百病は皆気より生ず、病とは氣やむ也」（中国最古の医学書『黄帝内経』）といわれるが、黒船来港に遭遇して青春の蹉跌を踏み、生き甲斐であった学問的大成への夢が破れた精神的な衝撃は、天然痘の後遺症をもつ彼が、再び難病を発症する大きな誘因になったものと推察することができる。

臥蓐十年又値災	臥蓐十年又災に値ふ <small>がじよくあ</small>
家貧一事最堪哀	家貧の一事最も哀しむに堪へたり
慈親六十髮将雪	慈父六十にして髮将に雪ならんとす
井臼恂悒病養児	井臼恂悒の病児を養ふ <small>せいきゅうこうそ</small>

〈意訳〉

病床に伏して十年が過ぎ、又新たな災難に会う。家が貧しいことは最も悲しく耐え難いことである。優しい父が六十歳を迎え、髪の毛も雪のように白くなった。その父が、井戸水を汲んで臼で米をつき、病気で苦しんでいる子どもを養っている。

・漢詩史料④「感を書す」（幕末安政期）

次の漢詩には「三十余の春夢の裡に過ぐ」とある故、幕末安政期の、いまだ30代前半の作品とみられる⁽²⁰⁾。病状はかなりの重症であるが、長岡藩や日本国の将来を遠望して、憂国の情なお止みがたい。が、如何せん、病身の身では何事もなしえない。謹慎中の孤独な闘病生活の中で、現実を超越して、虚無の心境に向かおうとする心情が表現された作品といえる。

良辰殊覚憾情多	良辰殊に憾情の多きを覚ゆ
三十余春夢裡過	三十余の春夢の裡に過ぐ
畴昔雄飛騁壮志	畴昔雄飛して壮志を騁せ
加今雌伏苦沈疴	加て今雌伏して沈疴に苦む
憂存家国道無達	憂ひ家国に存すれど道達する無し
身歴災患心不磨	身災患を歴て心磨かず
杯酒破愁非所願	杯酒愁を破るは願ふ所に非ず
梵香端坐味天和	香を梵き端坐して天和を味ふ

〈意識〉

縁起の良い日には殊更に恨み辛みの感情が湧いてくることが多いことに気づく。三十回余りの春を夢中で過ごしてきた。昔は雄鳥が舞い飛ぶように（勢い盛んに活躍するような）大志を抱いた。だが、今は病床にあって活躍する機会をじっと待っているが、長く治らない重い病に苦しんでいる。長岡藩や日本国の行く末を憂慮するが、病身ではどうしようもない。身は不幸を体験したが、それによって心は磨けてはいない。酒で憂いや悲しみを紛らわすのは本位でない。香を焚いて正座し、静かに自然の穏やかさを味わうしかない。

・漢詩史料⑤「壬戌の春に作す」（文久2、1862年）

次の作品は、詠まれた年月が明らかな作品である⁽²¹⁾。文久2年（1862）というと、処女論文「興学私議」（安政6年、1859）を執筆してから3年後のこと。この頃の虎三郎は、なおも謹慎の身にあり、日々、自宅に籠もって詩文の執筆やオランダ原書の翻訳など、病苦に耐えて学究生活に努めていた。しかし、具体的な成果を公表した形跡

はみあたらない。

この漢詩は、彼が難病を発症してから7年が過ぎた、いまだ30代半ばの壮年期の作品である。いつ癒えるとも知れない闘病生活の中で、身も心も疲労困憊の病状が吐露されている。将来への展望を描けないほどに絶望的な状況にあって、病軀に苦悩する虎三郎は、なおも回復への一縷の希望を抱き続ける。自分と同じく、30代に重病に罹り7年間も病床にあった中国後漢の学者（趙岐、台卿は字）が、快癒して復活し、学者として活躍したという古事（『後漢書本伝』）を思い起し、自分も本復して再起したいと願う哀切の情が吐露された漢詩である。

七年臥蓐起猶難	七年蓐に臥して起きること猶ほ難し
有志無時徒苦神	志有るも時無くして徒に神を苦しむ
誰料台卿当日事	誰か ^{だいけい} 台卿当日の事を料らん
如今乃復及吾身	今乃ち復た吾が身に及ぶが如し
台卿趙岐初字	台卿は ^{ちょうぎ} 趙岐と初めは ^{あざな} 字す
岐年三十余	岐年三十余にして
有重病臥蓐七年	重病ありて臥蓐すること七年
事詳干後漢書本伝	事は後漢書本伝に詳らかなり

〈意識〉

七年間も病気で床に伏し、なお起きることは難しい。大志は消えないが、時間が無く、ただ精神を病んでいる。台卿（後漢の学者）のことを誰も予測できないように、今、同じように私の身に及んできたことを誰も予測はできない。台卿の最初の名前は趙岐と書き、彼が三十歳を過ぎで重病に罹り、七年間も病床に伏した。このことは後漢書本伝に詳しく記されている。

・漢詩史料⑥「人に答ふ」（文久2、1862年）

この作品も、前の漢詩と同じ文久2年のものである⁽²²⁾。この頃、虎三郎の病状はかなり悪化して心身の衰弱は激しく、もはや持てる才能を発することなどは全く望みえず、まるで無能者のような絶望的な状況にあった。病苦に沈んで何事もなすことが

できない無念の心情が汲み取れる作品である。

病衰殊覚鈍才鋒	病衰し殊に才鋒の鈍るを覚ゆ
慷慨難追古哲蹤	慷慨す古哲の蹤追ひ難しを
身是泥蛇分沈晦	身は是れ泥蛇にして沈晦を分とす
興雲行雨付神龍	雲を興し雨を行は神龍に付す

〈意訳〉

病気で衰弱して鋭い才気が鈍ってしまったことに気付く。いくら憤り嘆いてみても、昔の優れた先人の跡に追い付くことは難しい。体は泥中の蛇のように、ままならず闇に沈み、もはや雲をおこし雨を降らせることは龍神に任せるしかない。

・漢詩史料⑦「攘夷の詔の下るを聞き慨然として詠を為す」（文久2、1862年）

この漢詩が詠まれた文久2年（1862）という年は、水戸浪士による老中の安藤信正（磐城平藩主）襲撃事件（1月、坂下門外の変）で幕開けし、2月には公武合体を象徴する皇女和宮と第14代将軍徳川家茂との婚儀が挙行された。だが、この年には、寺田屋騒動（4月）や生麦事件（8月）など、攘夷運動が高揚して物騒な事件が相次いで勃発した。そのように排外運動が激化する最中の9月、孝明天皇を戴く朝廷は異国船排除の攘夷を決定し、この天皇詔勅を幕府が奉承したのが同年11月のことであった。

このとき虎三郎は、いまだ長岡の自宅に謹慎中で、病軀に苛まれて何の希望も抱けず、ひたすら詩文の執筆やオランダ原書の翻訳などの学究生活に明け暮れていた。当時、長岡藩第11代藩主の牧野忠恭（1824-1878）は、幕府の寺社奉行を経て文久2年には京都所司代となり、翌3年には老中に就任する。藩主が幕閣の中枢にあったが故に、虎三郎は、藩の関係者を通じて天皇や将軍に関わる中央政界の最新情報を入手できる立場にあった。すでに黒船来港のときに恩師象山の横浜開港説を奉じて決起していた虎三郎は、いまだ憂国の情やみがたく、朝廷の攘夷詔勅を時代錯誤の愚行と厳しく断じて批判し、憤慨して詠んだのがこの漢詩であった⁽²³⁾。

このとき、虎三郎35歳。難病に懊悩する虎三郎の病状は勝れず、心身共に衰弱し

て、国家存亡の危機に際して何事もなしえない無為無力の自分自身を嘆き悲しむしかない。そんな彼の無念の胸中が、端的に吐露された作品である。

なお、この年の12月には、門人吉田松陰の海外密航事件に連座して断罪された恩師の象山が、信州松代での9年に及ぶ蟄居謹慎を赦免され、尊皇開国の自説を掲げて上洛し、幕末動乱の政治渦中に身を投じていくことになる。

勾踐忍羞克興国	勾踐 ^{こうせんしゅう} 羞を忍びて克く国を興す
魏營好戦卻傷民	魏營 ^{ぎおう} 戦を好みて卻 ^{かえ} って民を傷つく
可憐久病衰殘客	憐む可し久しく病む ^{すいざん} 衰殘の客
起望南天空慨呻	起きて南天を望み空しく慨して呻す

〈意識〉

勾踐^{こうせん}（越国の王）は恥を忍んで国を興し、魏營^{ぎおう}（魏国の恵王）は戦いを好んで民を傷つけた。長期にわたる病で衰え弱りはてた客は憐れなものだ。病床から起きて南の空を見上げ、空しく嘆き悲しんで詩を吟じる。

・漢詩史料⑧「癸亥の春に感を書す」（文久3、1863年）

この漢詩は、前作（「攘夷の詔の下るを聞き慨然として咏を為す」）の翌年に当たる「癸亥^{きがい}」、すなわち文久3年（1863）に詠まれた作品である⁽²⁴⁾。内外共に風雲急を告げる徳川幕藩体制の最末期の危機的な時代状況の下で、何としても国家の役に立ちたいと庶幾^{こうねが}う虎三郎。だが、病状は非常に重く、薬も針も届かない深部の苦痛に煩悶しながら、彼は、いつの日にか持病が癒えて、再び恩師象山から学んだ西洋砲術や西洋兵学の講義ができる日が到来することを念じて生きる、当時の痛々しい心境が詠まれている。

時危志士多憂慮	時危うくして志士憂慮多し
況我臥床殊苦情	況んや我は床に臥して殊に情を苦む
何当得脱膏肓厄	何んぞ当に膏肓 ^{こうこう} の厄 ^{やく} を脱して
復為邦家講砲兵	復た邦家の為に砲兵を講ずるを得べきか

〈意識〉

危機の時代には多くの志士が憂慮する。まして病床に伏している私の心情は苦しい。いつの日にか膏肓（難病）の災難を脱して、再び国家のために西洋砲術や西洋兵学を講ずることができるであろうか。

※膏肓：漢方医学では、心臓と横隔膜の間の薬も針も届かない最も深いところを「膏肓」という。中国の四字熟語で「病入膏肓」とは 病気が非常に重く、治せる方法がないことを指す。また、事態が非常に重く、元に戻れないことをも意味する。

・漢詩史料⑨：「災後に新居偶成す」（文久3、1863年）

謹慎中の文久3年（1863）、虎三郎の家は、火災に見舞われ全焼した。これによって、彼が苦勞して蒐集してきた和漢洋の膨大な蔵書は、一瞬にして灰燼に帰してしまった。間もなく新築なった自宅に病身を休める虎三郎であった。だが、消失した蔵書は戻らず、もはや学問的大成や栄華栄達など望むべくもない。俗世間を離れ一人静かに古典に親しむしかない諦念の情を詠んだ漢詩である⁽²⁵⁾。

図書千卷委灰燼	図書千卷灰燼 <small>かいじん</small> に委 <small>き</small> す
小屋初成寄病身	小屋初めて成り病身を寄す
学芸臚邦天或諒	学芸邦に臚 <small>むく</small> ゆを天或いは諒せん
窮通有命我何颺	窮 <small>きゅうつう</small> 通命ありて我何ぞ颺 <small>ひん</small> せん
時危切憶敬与智	時危うして切 <small>けいよ</small> に敬与の智を憶ふ
母老唯嘆子路貧	母老ひて唯だ子路の貧を嘆くのみ
迂介任他俗児笑	迂介任 <small>うかいさもあらばあれ</small> 他俗児の笑ふを
幽情每与古人親	幽情毎 <small>ゆうじょうつね</small> に古人と親しむ

〈意識〉

沢山の蔵書が灰燼にきしてしまった。小屋のような家ができ病身を寄せる。

学問をもって国に報いることを、天が許してくれるかもしれない。貧窮も栄達も命があつてのことと、私は眉を^{しか}顰める。危機の時代には心から敬与の智慧を想い、母が老いてただ子路の貧窮を嘆くばかりである。世事に迂遠な人は、世間一般の人に笑われても、それはそれでやむを得ないことである。静かな心情で常に古人と親しむしかない。

・漢詩史料⑩：「偶作二首 丙寅」（慶応2、1866年）

この漢詩は、徳川幕府が倒壊し明治の近代日本が到来する僅か2年前に詠まれた作品である⁽²⁶⁾。すでに欧米諸国と和親条約や通商条約を締結し、攘夷鎖国の旧論は破れ去ったかにみえた。だが、欧米列強に対する日本の対応方針を巡って、なおも佐幕（幕藩体制）か尊皇（天皇制）か、攘夷（外国排除）か開国（進取究明）か、諸説紛々の混沌とした時代状況にあった。植民地獲得を競う欧米列強の本質を「力は正義」の侵略主義と見透かしていた虎三郎は、欧米列強に対する日本の対応方針を統一し、新生日本の誕生に向かって確かな国是（国家の基本方針）の形成が緊要課題であることを主張し、その実現を希求する。そのような国家の重大時局に憂国の情を募らせながらも、肝心の自分自身は病気に苦悩して無為無策の生活を送っている。明治の夜明け前、長岡の自宅に閑居して、古人を友とする読書で病軀の苦痛を耐えるしかない孤独な心境を吐露した作品といえる。

紛々異説盈朝夜	紛々たる異説朝夜に ^み 盈つ
国是何時見一新	国は何れの時にか一新を見る
病身無復回天力	病身は回天の力を復するなし
不若閑居友古人	閑居して古人を友とするに若かず

〈意識〉

様々な主義主張が朝から晩まで飛び交い入り乱れる。いつになったら国の方針が一つにまとまるのか。病気の身では時勢を一変させる力はない。世俗を離れて静かに古人を友として生きればよいではないか。

・漢詩史料⑩：「十年」（慶応年間）

次の作品は、前作の「臥蓐」と符合する内容の漢詩である。虎三郎が41歳のとき、慶応4年（1868）の作品で、戊辰戦争が勃発する直前と推定される⁽²⁷⁾。漢詩には、「十年臥病」とある。この時点で、彼は、すでに10年にも及ぶ長い闘病生活を送っていた。30歳を迎える前の安政年間に発病したときから逆算すれば、闘病生活の年数は合致する。長患いにも拘わらず、依然として憂国の情は少しも衰えない。回復の希望のない難病の故に、もはや世間の表舞台に出て栄誉栄達や立身出生は望むべくもない。そんな彼は、俗世間の毀誉褒貶は一時のもので取るに足りないものである、と諦念する。そう思えば、栄誉栄華を求めて右往左往する俗世間の才子は、全くもって哀れな存在である。そんな愚痴とも諦観とも取れる、彼の現実を超越しようとする心境を表現した作品といえる。

十年臥病僅支持	十年病に臥して僅かに支持す
憂国丹心猶未衰	憂国の丹心猶未だ衰えず
顕達立功匪無意	顕達立功の意無きに <small>あら</small> 匪 <small>ず</small>
隱居求志且隨時	隱居して志を求め <small>しばらく</small> 且く時に随ふ
一生毀誉我何管	一生の毀誉我何ぞ管せん
万古是非天自知	万古の是非天自ら知る
卻愍世間才俊士	<small>かえ</small> 却つて <small>あわれ</small> 愍む世間才俊の士
利名場裡醉如癡	利名場裡 <small>じょうり</small> 酔 <small>ち</small> うて癡の如き

〈意識〉

10年間も病床に伏し僅かに持ちこたえている。国の将来を憂い嘆く真心は、いまだに衰えない。栄誉栄達や立身出世の意欲もないことはない。隠居して志を求め、しばらく時に任せている。毀誉褒貶（世間の評判）は気にする必要はない。天は、目先に囚われず、一万年の単位で是非をみる。憐れむべきは世間の才知に優れた人たちである。彼らは、利益と名誉の世界で酔っている愚か者のようだ。

・漢詩史料⑪：「病に臥す」（慶応年間）

次に紹介する「病臥」と題する作品もまた、前掲の「臥蓐」や「十年」と同様、慶応4年に戊辰戦争が勃発する直前に詠んだ作品と推定できる⁽²⁸⁾。幕末動乱の時代状況の中で、日本という国家の将来を展望し、国民の信頼を基盤とした富国強兵の実現を遠望する。だが、病身の自分には何事もなしえない。終わりのみえない病魔との戦いの中で、希望と絶望の狭間に揺れながら、ままならない現実に対する無念の心境を吐露した作品といえる。

病臥高楼風雪時	病に臥して高楼に風雪の時
熟観世事転堪悲	^{つらつら} 熟 世事を ^{うた} 観て ^{うた} 転た悲しみに堪へたり
財空兵弱国何立	財空しく兵弱くして国何ぞ立たん
信失刑淫民漸離	信を失ひ ^{みだら} 淫に刑して ^{だんだん} 民 漸 離る
坐待敗亡誰又願	坐して敗亡を待つ誰か又願はん
務謀興復未為遅	務めて興復を謀る未だ遅しと為さず
閑憂欲訴無媒介	閑憂を訴へんと欲して媒介無し
付与一篇艱澁詩	付与す一篇の艱澁の詩に

〈意識〉

病床に伏し高楼に風雪が吹き荒れるとき、じっと世事をみつめ悲しみに堪えている。財無く兵弱くして、国はどのようにして立つのか。信用を失い、刑罰が乱れては、国民はだんだん離れていく。座して戦いに敗れ滅亡するのを待つことを、誰も望んではない。興復を謀ることはまだ遅くはない。閑暇の中で憂いを訴えたいが、媒介とするものがないので、一篇の難解な詩に託すしかない。

・漢詩史料⑬：「冬の日に偶作」（慶応年間）

この作品も幕府が倒壊する直前のもので、国家の重大局面に際会して何事もなしえない無為無力な自分自身を、亀が首を甲羅の中に縮め込んでいる姿に譬えて表現している⁽²⁹⁾。家人さえもが呼べども気づかず、一人、閑居の孤独な心境を詠んだ作品である。

病来殊怯寒	病来りて殊に寒さに ^{おじ} 怯ける
-------	-----------------------------

矧斯風雪時	^{いわん} 矧や斯の風雪の時をや
擁被頻縮首	被を擁して頻りに首を縮む
恰如蔵大亀	^{あたたか} 恰も蔵大の亀の如し
家人時相呼	家人時に相呼ぶも
往々不聞知	往々聞知せず

〈意識〉

寒さが浸み入る病気を発病してからは、特に寒さにおじけてしまうようになった。風雪のときはなおさらである。布団にくるまって、いつも首を縮め、あたたかも大きな亀のような姿である。用事があって家の者を呼んでみても、しばしば聞こえず知られないでいる。

・漢詩史料⑭：「多病」（慶応年間）

この作品もまた、慶応4年（1868）に戊辰戦争が起きる直前の作品と推定できる。謹慎処分を受け、すでに10年以上も病軀に耐えて自宅に籠もり、本来ならば活躍の舞台であるべき長岡城に登城することさえできない。幕末動乱の時代展開に翻弄される長岡藩に思いを馳せ、その行く末を憂慮する忠臣・虎三郎の心情が素直に吐露された作品といえる⁽³⁰⁾。

多病久閉子	多病の ^{きゅうへいし} 久閉子
幾歳不入城	幾歳も城に入らず
友朋咫尺在	友朋 ^{しせき} 咫尺に在れど
疎闊若参商	^{そかつ} 疎闊参商の若し
臥看時物変	臥して時物の変を看て
飽送月日行	飽くまで月日の行くを送る
世事易嗟嘆	世事 ^{きたん} 嗟嘆し易く
幽懐向誰傾	幽懐誰に向ひて傾けん

〈意識〉

幾つもの病気に罹って門戸を閉じ、ずっと引き籠もっている。何年も城に入らず、

極めて近くに友人がいるのに、久しく会うこともできず、まるで隔絶されているようだ。病床にあって時物の変化をみ、歳月の流れを見送っている。世事を嘆きやすくなり、内に秘めた想いを誰に向かって伝えればよいのか。

(2) 戊辰戦後四十代の漢詩に記された病状

・漢詩史料①：「戊辰の初春に偶作」（慶応4、1868年）

この漢詩は、戊辰戦争が勃発した慶応4年に詠まれた作品である⁽³¹⁾。不惑を過ぎ、また春が巡ってきて一年が過ぎる。だが、病身の自分は、戊辰戦争に突入して官軍と交戦する長岡藩の行く末を憂いてみても、何もできない無力で孤独な存在であると、自らを嘆き悲しんでいる。

不惑過來又一年	不惑を過ぎ来りて又一年
回頭往時夢茫然	頭を回せば往時は夢と茫然たり
病身憂国難為補	病身国を憂ふるも補ひなし難し
矮屋守愚好学禅	矮屋 <small>わいおく</small> に愚を守り好んで禅を学ぶ
燈火暗明地爐畔	燈火暗明にして地爐 <small>ちろ</small> の畔
雪声淅瀝紙窓前	雪声 <small>せきれき</small> 淅瀝たり紙窓の前
夜寒無客敲柴戸	夜寒くして客の柴戸 <small>たた</small> を敲く無し
一鼎芳茶手自煎	一鼎 <small>いっぺい</small> の芳茶 <small>てずか</small> を手 <small>に</small> 自ら煎る

〈意識〉

四十歳を過ぎてまた一年が巡ってくる。昔を振り返ってみれば夢のようにぼんやりとしている。病気の身で国の将来を憂い嘆いてみても何の役にもたたない。粗末な家で愚を守り、好んで禅を学んでいる。囲炉裏のそばで燈火が暗くなったり明るくなったりして、障子の前では雪が音を立てて降っている。夜は寒く粗末な家の戸をたたき客もない。自ら一杯の香ばしいお茶を煎じて飲む。

・漢詩史料②：「戊辰春作」（慶応4、1868年）

次の「戊辰春作」と題する漢詩は、慶応4年（1868）、戊辰の年に勃発した戦争の最中に詠まれた作品と推定できる⁽³²⁾。官軍の猛攻を受け戦火が長岡の城下に迫りくるとき、母親を連れて避難する虎三郎。心身共に疲労困憊の虎三郎は、長岡藩存亡の危機を目前にして何事もできない己自身を恨むしかない、虚しさに満ちた心境を吐露している。

余臥蓐十三年	余臥蓐 <small>がじよく</small> して十三年
一旦值宗社顛覆	一旦宗社 <small>そうしや</small> の顛覆 <small>てんぷく</small> に値 <small>あ</small> ひ
奉北闈以遁	北闈 <small>ほくい</small> を奉じて以て遁 <small>のが</small>
間関崎嶇	間関 <small>かんかん</small> 崎嶇 <small>きく</small> として
来匿戸口村	来りて戸口村 <small>かく</small> に匿れる
疲困益甚	疲困 <small>ますます</small> 益甚しく
無復能為也	復た能くならず無きなり
痛恨之余	痛恨の余り
執筆書此	筆を執りて此を書す

〈意識〉

私は病床に伏して十三年になる。瞬時に長岡藩は落城し、母親を連れて逃げ延びた。険しい山道を通って、戸口村に来て隠れた。疲労困憊して、何事もなすことができない。痛恨の余り、筆を執りこの一文を書いている。

・漢詩史料③：「病起」（明治5年頃）

次の「病起」という漢詩は、戊辰戦争の後に上京した虎三郎が、実弟の土佐行きに同行した高知から東京に舞い戻った明治5年頃の作品と推定できる⁽³³⁾。難病を発症して20年もの歳月が流れた。それでもなお、何としても回復し再起したいと切願する微かな希望が詠み込まれた作品である。

吾正病時花正落	吾正に病むとき花正に落つ
臥床忽已度兼旬	臥床 <small>がしょう</small> 忽 <small>たちまち</small> 已 <small>すで</small> に兼旬 <small>けんじゅん</small> を度 <small>わた</small> る
今朝試上高楼望	今朝試みに高楼に上りて望めば

満目新林翠色勻 まんもく しんりんみどりいろ 満目の新林翠色に勻ふ

〈意訳〉

私が病むとき、花はちょうど落ちる。病床に伏して、たちまち二十年が過ぎた。今朝は試みに高樓に上って望めてみれば、あたり一面の新林が澄んだ緑色に匂っている。

・漢詩史料④：「感書」（明治初期の作品）

次の「感書」という漢詩もまた、明治5年頃の作品と推定できる⁽³⁴⁾。病状は一向に快方に向かわず、内臓の奥底から込み上げる痛みに懊悩し、すでに薬効もなく、ただ虚しく歳月が過ぎていく様子を詠んでいる。

奈何久苦膏肓厄	久しく膏肓の厄に苦しむを奈何せん
有若俊鷹折遠翮	俊鷹遠翮を折るが若きあり
藥石無驗歳空逝	藥石驗無く歳空しく逝き
百事差違遲暮迫	百事差違へて遲暮迫る

〈意訳〉

久しく難病を患って苦しんでいるが、どうしようもない。まるで優れた鷹が遠くへ飛んでいく羽根を折ったようで、どんな治療も効果がなく、年月だけが空しく過ぎていく。色々なことが入れ替わって、だんだんと老境に近づいていく。

(四) 書簡に記された病状記録

・書簡史料①：明治5年（1872）5月25日付「三島億二郎宛」

次に紹介する書簡は、虎三郎が高知から東京に戻った直後に書いたもので、すでにこの時点で彼は、著名な西洋医の治療を受けていたことがわかる⁽³⁵⁾。病状は、もはや翻訳書も読めないほどに悪化し、「懶慵」（らんよう）（疲れて怠く物憂い）という症状に苦しん

でいた。だが、これから他界するまでの5年間は、彼の天命とも思われる本格的な学究活動が東京で展開される時期で、歴史教科書『小学国史』（全12冊）の編輯刊行、中国漢書『大徳国学校論略』（上下2冊）の翻刻刊行、英米翻訳教育書（『学室要論』『教師必読』『童女筌』）の校訂刊行など、日本の教育近代化に関わる顕著な業績が相次いで発表される。自己の存在をかけ病苦に耐えて国家のために何事かを成し遂げようとする虎三郎の悲壮な使命感と、それを支える強靱な意志力には、ただ驚嘆するばかりである。

小生容体兎角不宜、時々外出ハ致候へ共、翻訳書すら読不得、飲酒不快酔、西医と薬方も更ニ効験を不見、意志肅索ノ無聊送光、慨嘆之至ニ御座候。何角懶慵不能多言。

・書簡史料②：明治5年（1872）10月10日付「田中春回宛」

先の三島宛書簡に続いて、これまた虎三郎が、長岡藩の後輩である田中春回（1833-1911、美談「米百俵」に有縁の長岡学校（現在の新潟県立長岡高校）の教師）に宛てた書簡である⁽³⁶⁾。

このとき虎三郎は、持病である「風湿」（慢性リウマチ）を病んでからすでに20年が過ぎ、さらに今また肝臓病や皮膚病を併発し、それらの病気に特有な脱力感、掻痒感、食思不振などの症状に苦悶して精神的に沈鬱の状態にあったこと、東京の開業医や外国人医師など著名な医者の治療を受けてはいるが一向に回復の見込みがないこと、読書も飲酒もできずに部屋に閉じこもって仰臥の日々を送っていること、等々、心身共に耐え難い病状の数々が詳細に記録されている書簡である。

ところで、書簡に記された虎三郎の診察と治療にあたった主治医であるが、まず西洋医の「日耳曼医、空児尼非氏」とは誰なのか。東京大学医学部の前身となる国立医学校に「大学東校」があった。その医学校の教官としてドイツから招聘された教授に「ヴェルニヒ（A.L.Agathon Wernich）」という内科医がいた。大学での担当科目は、「内科学諸科並びに内科学臨床講義及び外来内科臨床講義」であった。この教授が、虎三郎を診察し治療に当たった西洋医の「空児尼非」であったと推測される⁽³⁷⁾。

次に「東洋佐々木氏」であるが、こちらは幕末明治の西洋医学界で著名な内科医

であった「佐々木東洋」(師興、1839-1918)に間違いない。佐々木は、佐倉順天堂で佐藤泰然(1804-1872)に西洋医学を学び、さらに長崎に遊学してオランダ軍医のポンペ(Pompe van Meerdervoort, Johannes Lidys Catherines, 1829-1908)に直接師事して、本格的に西洋医学を修めた名医である。彼は、文久2年(1861)に幕府軍艦の軍医となり、明治2年には大学東校(東京大学医学部の前身)に転じ、少助教、中助教、権大助教、内科部長と昇進し、さらに御雇外国人教師のドイツ人医師ホフマン(Hoffmann, Theodor Eduard, 1837-1894)に就いて西洋医学(内科学)の蘊奥を究めた。その後、大学東校を辞して民間病院に転じたが、再び東京府立病院副院長を経て大学に戻り附属病院長を歴任した⁽³⁸⁾。

何と、虎三郎は、当時の日本医学界を代表する西洋医の治療を受けていたのである。なぜ、虎三郎は、そのような一流の医者たちの診察や治療を受けることができたのか。東京大学の医学部教授となる甥の小金井良精は、虎三郎などの仲介で大学東校に入学したのが明治5年(1872)で、卒業したのが虎三郎没後の同13年(1880)であった。したがって、いまだ若輩であった良精の人脈は考えられない。

しかし、明治初期の日本にあっては、虎三郎自身が歴史的に著名な人物であった。彼は、勝海舟や加藤弘之など、同じ象山門人で維新政府や学界関係に錘々たる人脈を有していた。さらに、慶応義塾で福沢諭吉の薫陶を受けた実弟の雄七郎も、維新政府に出仕し、政府関係に相当の人脈を持っていた。

以上のような虎三郎の人間関係の中で、虎三郎は、当時としては最高位の西洋医学者の診察や治療を受けることができたものと推察される。しかし、どのような治療や投薬を受けても、虎三郎の罹患した病気(風湿と呼ばれた慢性リウマチ、肝臓病である肝硬変、皮膚病など)は、快癒の見込めない難病であった。それ故、彼は最後まで過酷な症状に苛まれて後半生を生きなければならなかったのである。

僕患風湿既二十年

僕風湿を患ひて既に二十年

昨春来更発一症

昨春来更に一症を發し

肝臓時時激痛

肝臓時々激しく痛み

食機不振

食機は振わず

精神沈鬱

精神は沈鬱し

皮膚発疹

皮膚は発疹し

奇癢殆不可忍	奇癢殆ど忍ぶべからず
因至夏入下谷医院	因って夏に至りて下谷医院に入り
受日耳曼医空児尼非氏治	^{ゼルマンイ} 日耳曼医、 ^{ウイルニヒ} 空児尼非氏の治を受く
及秋遊浴伊豆熱海温泉	秋に及んで伊豆熱海の温泉に遊浴し
入冬而還	冬に入りて還る
更乞治東洋佐々木氏	更に治を東洋佐々木氏に乞ひ
前後調摂尽力	前後調摂に力を尽くす
雖病患増進之勢似得遏止	病患増進の勢を ^{あつし} 遏止するを得たるに似たりと雖も
而至於確然全癒之功	確然たる全癒の功に至りては
則茫不可期	則ち茫として期すべからず
不能讀書	読書する能わず
不能飲酒	飲酒する能わず
探花吟月	花を探し月を吟じ
訪友接客	友を訪ね客に接す
皆不得如意	皆意の如くを得ず
仰臥一室	一室に ^{ぎょうが} 仰臥し
苦悶之外	苦悶の外
無復他事	復他事なし
惟自憫笑耳	惟だ自らを ^{びんしょう} 憫笑するのみ

〈意識〉

私は、風湿（リウマチ）を患って、すでに20年。昨年の春、更にもう一つの病状があらわれた。肝臓が時々激しく痛み、食欲はなく、精神的に気分は沈み、^{ふさ}鬱ぎ込んでいる。皮膚に発疹し、その尋常でない痒みにはとても耐えきれない。夏に至って下谷医院に入院し、ドイツ人医師（^{ゼルマンイ}日耳曼医、^{ウイルニヒ}空児尼非氏）の治療を受けた。秋には伊豆熱海に温泉療養に出かけ、冬に入って東京に戻った。東京では名医の佐々木東洋氏に治療を頼み、体調の健康保持に心を配って頑張った。病状が悪化するのを食い止めることができたかにみえたが、はたして病気が全快するかどうかは、漠然としていて期待はできない。読書はできず、飲酒もできない。花を探し求めて月を吟じ、友を訪ねて客に接したりしたいと思うが、何もかもが

思い通りにならない。一室に仰向けに寝て、苦しみ悶^{もだ}えること以外、他のことは何もできない。ただ自らを憐れみ笑うのみである。

・書簡史料③：明治6年（1873）1月4日付「三島億二郎宛」

高知から東京に戻った虎三郎が、歴史教科書『小学国史』（全12冊）を編輯し、その第1巻が明治6年（1873）4月に刊行される。この書簡は、その年の正月に出されたものである。文中に「例の胸患チト不宜候」とあるが、後述するように甥で東京大学医学部教授となった小金井良精が、晩年の虎三郎の病状に関して「軽症の結核」と記していることから、結核（結核菌感染による感染症疾患）の症状ではないかと推察される⁽³⁹⁾。

鼎此地発足迄の小生況状は定て御承知被成下候事と奉存候。其後少々感冒仕以来、例の胸患チト不宜候へ共、為差事にも無之候間、御過念被下間布候。⁽⁴⁰⁾

・書簡史料④：明治7年（1874）3月4日付「三島億二郎宛」

前述のごとくに虎三郎は、この書簡の前年に自ら編輯した『小学国史』の刊行を開始する。最終巻が出て完了するのは、この書簡を執筆した後の同年7月である。さらに同じ7年に、虎三郎は、引き続き中国で刊行されたばかりの漢書『大徳国学校論略』に訓点を施し、序文を同年7月に書き上げて、10月には『徳国学校論略』（上下2冊）を明治初期の近代化過程にある日本に翻刻紹介している。

戊辰戦後に美談「米百俵」が誕生した後、郷里長岡を離れて上京した明治4年以降、40代後半の最晩年に当たる数年間は、虎三郎が最も活発に学究的活動を展開し、後世に残る作品の数々を創出した時期であった。だが、そのような虎三郎の顕著な活動は、次の書簡中に「例の骨接痺痛、加ふに熱氣有之」と記されている通り、長年に亘る不治の病である「風湿」（慢性リウマチ）と対峙し、心身を蝕む過酷な症状に耐えながら展開された必死の活動であった。

小生も新年来此地（東京）例外の雪寒の為に畏縮勝に過ぎ、去月下旬より稍温暖を催し候に付、出掛、屢々遠近の知音を訪などいたし候内、本月十日前の再返り審^(ママ)さに中^{あて}られ、例の骨接痺痛、加ふに熱氣有之、夫も苦悩の間も暫くにて、

追々宜しく候に付、頃日試に酒を用見候処、又々中られ、発熱いたし、三四日臥養候へ共、未だ宜しき場合に至らず、困却罷在候。乍去多分不利遠可宜と考候間、御過慮被下間布候。⁽⁴¹⁾

・書簡史料⑤：明治9年（1875）12月19日付「三島億二郎宛」

次の書簡は、虎三郎が他界する前年の明治9年（1876）、49歳のときのものである。すでに病状は相当に悪化し、東京在住の外国人医師（御雇外国人のドイツ人医師や内科学の権威である佐々木東洋）などの名医から治療を受け、必死の療養生活を送っていた。このとき彼は、長年の持病である「風湿」（リウマチ）の他に、肝臓病（肝硬変）を併発し、肝臓疾患に特有の症状と思われる「黄疸」（全身の皮膚・粘膜が黄色調に変化）に苦しんでいた⁽⁴²⁾。

書簡中に彼が併発した病名が「チルロース」と記されているが、それは、当時はまだ日本語訳がなかった「肝硬変」（cirrhosis）と思われる⁽⁴³⁾。その病気の自覚症状は、脱力感、搔痒感、筋肉痛、体重減少などである。病状が進行すると、さらなる合併症を誘発し様々な症状を呈することになる。腹水による腹部の膨満感やむくみ、消化管の静脈瘤の破綻による吐下血、脳症による意識障害・昏睡、食欲不振・悪心・嘔吐などである。20年に亘る持病（リウマチ）の他に肝硬変など、幾つもの病気を併発し、苦痛に満ちた症状の数々は実に耐え難く、心身共に病んで疲労困憊、精神的にも深い沈鬱の状態に陥っていたことが、書簡中に切々と綴られている。

図らずも一個の悪症を得候。最初尋常の^{おうだん}黄疸の心得に候処、左に無之、肝臓の慢性激衝し、一種の「チルロース」と申疾^{やまい}にて世間稀少の疾故、此方には未だ訳名も無之位候。乍去幸に療治手後れに成不申候故、先は維持いたし居候。但、何分難症故ウイルニヒ氏の治療も久しく受け、その後熱海遊浴もいたし候へ共、爾今全快の目途不相立、此節佐々木東洋氏の治を受候に、斯人も請合て治すとも不申、大部永く相成、随分困却罷在候。併夏頃小生事も春来に比すれば精神^{ちんうつ}沈鬱し病症稍薄く相成候間、御過念被下間布候。⁽⁴⁴⁾

・書簡史料⑥：明治10年（1877）7月付「北沢子進宛」

この書簡は、明治10年（1877）7月に執筆したもので、虎三郎が病没する2ヶ月

前のものである。彼は、この月の中旬から群馬県の伊香保温泉に病氣療養の湯治に出かけていた。療養先の伊香保で、象山塾の後輩で生涯の畏友であった北沢正誠きたざわまさなり（子進、信州松代藩、1840-1901）宛に書いた書簡である。当時、虎三郎は、肝臓疾患（肝硬変）の症状である皮膚病が悪化して苦悩し、何事にも意欲が湧かずに絶望的な日々を送っていた。耐え難い苦痛に懊悩する心境が端的に述べられている⁽⁴⁵⁾。

僕四月来	僕四月来
皮膚奇癢益甚	皮膚奇癢益々甚しく
殆不可忍	殆ど忍ぶべからず
抛棄百事	百事を抛棄 <small>ほうき</small> して
唯苦悶耳	唯々苦悶するのみ

〈意識〉

私は、4月以来、皮膚の尋常でない痒みがますます甚だしくなり、殆ど耐えきれず、色々なことを投げ捨て、ただ苦しみ悶もだえるのみです。

・書簡史料⑦：明治10年（1877）8月18日付「北沢子進宛」

この書簡は、死去する1週間前のもので、絶筆に近い⁽⁴⁶⁾。彼は、前月（明治10年7月）から群馬県伊香保温泉に病氣療養で逗留していた。すでに東京の名医たちの治療も万策尽き、温泉療養で病状を和らげるしかない日々を送っていた。そして、この書簡から1週間後の同年8月24日、病状が急変し、急ぎ東京向島の実弟雄七郎宅に戻った。しかし病状は好転せず、その日の内に病没した。享年50の悲運な一期であった。

なお、虎三郎が服薬していた薬が、書簡中に「規尼きにい」と明記されている。「規尼」とはオランダ語「kinie」の漢字表記で、現代の薬名では「キニーネ」(quinine)といい、「キナ」（アカネ科の常緑高木）の樹皮から抽出した「アルカロイド」の解熱剤で、主としてマラリアの治療薬として用いられる薬であった⁽⁴⁷⁾。

僕浴泉三週日	僕浴泉三週の日
昨年来諸患大減退	昨年来の諸患大いに減退す

頗以為喜	頗る以て喜と為す
何料旧患湿風忽発	何ぞ料らん旧患の湿風忽ち発して
<small>がじよく</small> 臥蓐十余日	<small>がじよく</small> 臥蓐十余日
猶不得起	猶起きるを得ず
無聊不可言	<small>ぶりよう</small> 無聊言ふべからず
但頼医士診	但医士の診を頼み
服規尼此薬	<small>きにい</small> 規尼を服するのみ

〈意識〉

私は、伊香保温泉にきて温泉療養をはじめて3週間で過ぎた。昨年来、いくつかの疾患が大いに減退したので、非常に喜ばしく思っていた。ところが、あにはからんや、予期せぬ古い疾患の「風湿」(リウマチ)が突然再発し発熱してしまった。寝込んでから十数日になるが、なお起きることができない。退屈だと言うべきではない。ただ医師の診療に頼り、「きにい規尼」という解熱剤を服用するのみである。

(五) 星新一『祖父・小金井良精の記』に記された病状記録

虎三郎の実妹(幸)の次男は、東京大学医学部教授の小金井良精で、その彼の娘の長男、すなわち良精の孫が、掌編小説(ショートショート)の神様と呼ばれた人気作家の星新一(1926-1997)であった。幼少期を東京本郷の良精宅で過ごした星は、祖父を偲んで伝記『祖父・小金井良精の記』を出版した。そこには、祖父が最も敬慕してやまなかった虎三郎が他界する前後の病状について、次のように記されている。

病翁・小林虎三郎は伊香保温泉で療養していたが、高熱の症状があらわれた。ただちに東京向島の雄七郎の家に帰ったが、手当のかいなく八月二四日に死亡。五十歳だった。良精はその最後を看病できず、残念だったにちがいない。⁽⁴⁸⁾

なお、『祖父・小金井良精の記』に引用された「小金井良精日記」には、虎三郎の甥である小金井良精が書き記した虎三郎の最期の様子が、次のように記されている。

明治十年（二十歳）

六月より、教授ランガルト氏が薬剤学を、ベルツ氏が内科各論を教授す。夏に帰郷す。家族はみな枋堀村にあり。兄君（権三郎）は西南の役にて出京の際なり。在郷中に病翁様、死去さる。⁽⁴⁹⁾

幼少時から愛育を受けた伯父の虎三郎が他界したとき、良精は、まだ東京大学医学部の学生であった。大学が夏季休暇中だったので、彼は郷里長岡の実家に帰省していた。それ故、彼は虎三郎の臨終に立ち合うことができなかつたのである。伯父である虎三郎は、彼が、西洋医学の道に進む際にも、進路選択の相談相手となり、医学校入学に際しては関係筋に紹介の労を取ってくれ、特に上京後の経済的支援を含めた後見人に、象山塾後輩の畏友である小松彰（1819-1888、信州松代藩出身）とその実弟（精一、良精の最初の妻の実父）を充てたのである。虎三郎の庇護は、実に大きかつた。虎三郎なくして東京大学医学部教授の医学者・小金井良精の誕生はありえなかつたといつても過言ではない。

おわりに

以上に紹介した諸史料の内容を総合的に勘案して判断すると、虎三郎が20代の半ばに発症して苦悩した病名は、「湿風」（慢性リウマチ、風毒）であり、その後さらに肝臓疾患の「チルロース」（肝硬変）や皮膚病、ついには結核などの病気を次々と併発した。明治4年に上京した後の晩年の一時、病状は好転したが、回復することなく進行して死に至つた。彼を苦しめた難病の数々は、幼少時に罹患した「天然痘」に遠因があつたのではないかと推察される。星新一は、東京大学医学部教授の祖父宅で生活を共にしながら成長したが、その間、折りに触れて医学者の祖父から虎三郎の病状についても伝聞していた。その星が、虎三郎の病状に関して次のように記している。

虎三郎は、じつは三男だった。しかし、幼時に天然痘にかかり、兄の二人はそれで死に、かろうじて彼だけが助かった。あばたが残り、片目を失明していた。そのうえ、病身でもあった。軽症の結核とリウマチであったらしい。越後は米作地帯、多湿は豊作をもたらすが、この種の病気にはよくない。このころから病翁という号を用いはじめた。⁽⁵⁰⁾

虎三郎が、江戸遊学を中断して長岡に戻り、自宅に謹慎したのは、数えて27歳を迎える安政元年（1854）の春であった。彼は、この直後に「風湿」（リウマチ）を発症したのである。以来、彼はリウマチに特有の様々な病状に苛まれ続ける。だが彼は、必死に病軀に耐えながら、長岡藩や日本の行く末を展望して憂慮し、何事かをなそうと最期まで懊悩した。病床に伏して難病と格闘していた彼が、戊辰戦争で廢墟となった郷土長岡の復興に際しては、一身をなげうって藩の要職に就き、教育立国思想の具体化をもって復興政策を計画立案した。その象徴的な出来事が「米百俵」の美談であった。しかし彼は、その直後に断行された廢藩置県を契機に、病氣療養を理由に長岡を去って上京する。東京で最先端の治療を受け、快癒したいという思いは本音であったと思われる。だが、上京後は、明治10年（1877）に病没するまでの数年間、あたかも病魔を撃退したかのように猛然と学究活動を展開し、日本近代化に関わる様々な著作を相次いで刊行した。しかし、病状は悪化の一途を辿っていたのである。彼の病気と病状を知るとき、彼が展開した活動とその具体的な成果は、奇跡の産物と思われるほどである。病魔と格闘しながら、何事かをなそうと最期まで苦悩した彼の人生は、常に永遠なる天と対峙して己の天命を問い、天に恥じなく己を全うせんとする、実に壮絶な一期であった。

【注記】

- (1) ウイルス性(天然痘ウイルス、^{ボックスウイルス ヴァリオラ}Poxvirus variola)の感染症である天然痘(^{とうそう}痘瘡、^{スモールボックス}smallpox)に関する理解と記述に関しては、南山堂『医学大辞典』(2006年、1464-1483頁)、医歯薬出版『最新医学大事典』(2005年、1300頁)、生涯教育シリーズ51『感染症の診断・治療ガイドライン』の「天然痘」(『日医雑誌』第126巻・第11号、2001年12月)、国立感染症情報センター編「天然痘研修資料」などの医学文献を参照した。
- (2) 日本においても、天然痘(痘瘡)は伝染病として恐れられていた。明治維新政府は、西洋先進諸国の医療制度を模した日本最初の医療制度に関する法規「医制」を制定し、明治7年(1874)に公布した。その中で伝染病と指定されたのが、「チフス・コレラ・^{とうそう}痘瘡・^{はしか}麻疹の四疾患」(新村托編『日本医療史』、吉川弘文館、2006年、同書228頁)であった。特に「痘瘡」、すなわち天然痘は、江戸時代に「種痘」という予防技術が確立され、さらに明治10年(1877)に制定された「天然痘予防規則」によって「強制種痘」が規定されて以来、患者や死者は減少傾向をたどった。だが、一旦、罹患した患者に対する治療法はいまだ確立されておらず、対症療法で凌ぐしかない難病であった(同書、228頁を参照)。
- (3) 小林虎三郎編『小学国史』の第1冊(1873年4月刊)に所収。
- (4) 小金井権三郎、小金井良精編『究志洞遺稿』(1894年)の「文」の部、47丁表。原漢文は「紀元二千五百三十四年。七月下澣。越後病翁小林虎撰于東京所居之求志楼。」
- (5) 山本有三『米百俵』(新潮社、1943年)、176頁。
- (6) 小林国治、国訳・略注『小林虎三郎の求志洞遺稿』(長岡市史双書第34巻、1995年刊)、122頁。なお、以下の「求志洞遺稿」からの引用資料は、原文は漢文である。読み下しに際しては、前述の小林国治、国訳・略注『小林虎三郎の求志洞遺稿』を参照し、先学の学恩の恩恵に浴した。
- (7) 前掲『求志洞遺稿』の「文」の部、8丁表。原漢文は「安政六年己未孟春力疾属草求志洞雙松迂夫虎」。
- (8) 同上『求志洞遺稿』の「文」の部、46丁裏。
- (9) 虎三郎編輯『小学国史』(全12冊)の第1巻(明治6年4月刊)の冒頭に収載された中村正直

の「序」。

(10) 西山英雄編『漢方医語辞典』(創元社、1984年)、294頁。

(11) 「風湿」「リウマチ」に関しては、前掲の西山英雄編『漢方医語辞典』(294頁)、小学館『日本大百科全書』第23巻(1988年、858頁)などを参照。

(12) 同上『日本大百科全書』第23巻、858頁。

(13) 前掲『求志洞遺稿』の「略伝」、3丁表。原漢文は次の通りである。

「翁之帰郷也。閉門閉居。無幾発病。頗罹難治之症。爾来抛卻百事。唯与薬炉相親。病間左右函書。作為詩文。独慷慨世態耳。」

(14) 前掲『求志洞遺稿』の「略伝」、3丁表-3丁裏。原漢文は次の通りである。

「長岡藩中。与翁馳名声者。有鵜殿団次郎・河井継之助・川島億二郎等。鵜殿被徵幕下。為目付役。与勝安房等。共与幕議。以故不常在藩。河井川島与翁共議藩政。迭上下其論。然以翁多在病床。不能施行持論。川島亦与翁同意。独河井反之。且以才弁服衆。遂昇頭職。掌握藩政。方官軍臨越。藩師誤方針者。皆出於河井之意。多亡壯士。其身亦戰没。可不慨哉。方是時。翁屢河井論失政。然臥病不能達其說。徒仰天浩嘆耳。蓋河井執藩政也。雖權力盛一時。至学力道德。不及翁遠。以故平素忌避翁。不用其說。翁亦知其論不容。不敢与藩政。至王政復古之日。唯養病閉居一室。」

(15) 前掲『求志洞遺稿』の「略伝」、3丁裏。原漢文は次の通りである。

「明治二年。藩主牧野息毅君。起翁与政。川島及同志諸士荐勸就職。翁不得已遂力疾応之。以任藩大参事。常在家統督文武政務。尋朝廷徵翁。举文部省博士。翁以病辞之。蓋朝臣中有知翁者薦举之也。」

(16) 前掲『求志洞遺稿』の「略伝」、3丁裏-4丁表。原漢文は次の通りである。□丁表。

「明治四年秋。以病少緩。到于東京。自安改元年得罪退国。已過十八年。(中略)十年七月。抵伊香保浴温泉。居数旬。俄然発熱。頗為劇症。八月二十四日。昇而帰寓。未一点鐘。溘焉而逝。享年五十歳。翁以多病終身不娶。故無子。翁有兄二人夭。翁以三男継家。翁次貞四郎則継家。」

(17) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、9丁表。

(18) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、9丁表。

(19) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、13丁表。

(20) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、9丁裏。

(21) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、10丁裏。

- (22) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、10丁裏-11丁表。
- (23) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、10丁裏-11丁表。
- (24) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、11丁裏。
- (25) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、12丁裏。
- (26) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、15丁表。
- (27) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、15丁表-15丁裏。
- (28) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、15丁裏-16丁表。
- (29) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、16丁表。
- (30) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、17丁表-17丁裏。
- (31) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、18丁裏。
- (32) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、19丁表。
- (33) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、26丁表。
- (34) 同上『求志洞遺稿』の「詩」の部、26丁表-26丁裏。
- (35) 前掲『小林虎三郎の思想 米百俵』、224頁。
- (36) 前掲『求志洞遺稿』の「文」の部、48丁表。
- (37) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料 御雇外国人』(小学館発行、1975年)、140頁を参照。なお、同書の230頁には、「ウエルニヒ」の履歴調書が記載されている。
- (38) 佐々木東洋に関する記述は、日蘭学会編『洋学史事典』(1984年)、『日本近現代人名辞典』(吉川弘文館、2001年)などを参照。
- (39) 「少々感冒仕以来、例の胸患チト不宜候」の「胸患」とは、「結核」に随伴して発症する「結核性胸膜炎」(tuberculous pleurisy)による「胸膜炎」の症状ではないかと思われる(南山堂『医学大事典』、1999年、575-577頁を参照)。
- (40) 前掲『小林虎三郎の思想 米百俵』、231頁。
- (41) 前掲『小林虎三郎の思想 米百俵』、231頁。
- (42) 「黄疸」(jaundice (icterus))とは、胆汁色素(ビリルビン, bilirubin)が血中に増加した状態の高ビリルビン血症(hyperbilirubinemia)の病気。症状は、全身に皮膚・粘膜が黄色調を呈し、脳髄液、間接液、尿、乳汁、唾液にも胆汁色素(ビリルビン)が出るようになる症状(前掲、南山堂『医学大事典』、294-295頁を参照)。
- (43) 「チルロース」、すなわち「肝硬変」(cirrhosis)は、「肝の線維化が増強し正常な小葉構造が消失して、結接形成をきたした状態」で、「腹水、浮腫、黄疸、肝性脳症、食道静脈瘤か

らの出血」などの症状(医学書院『医学大辞典』、2003年、450頁を参照)。なお、初期の症状には、脱力感、掻痒感、筋肉痛、体重減少などの症状が多く、進行すると合併症を併発し様々な症状(腹水による腹部の膨満感やむくみ、消化管の静脈瘤の破綻による吐下血、脳症による意識障害・昏睡、食思不振・悪心・嘔吐など)が顕著となる。

(44) 今泉省三『三島億二郎伝』(覚帳書店、1957年)、342-343頁。

(45) 前掲『究志洞遺稿』の「文」の部、49丁表。

(46) 同上『究志洞遺稿』の「文」の部、52丁表。

(47) 耐性マラリア治療薬「規尼」(quinine)に関しては、前掲の医学書院『医学大辞典』(529頁)、南山堂『医学大事典』(435頁)などを参照。

(48) 星新一『祖父・小金井良精の記』(河出書房新社、1974)、25頁。虎三郎の実妹(幸)は、長岡藩家臣の小金井良達に嫁ぎ、その次男が小金井良精であった。良精は、伯父の虎三郎などに進路相談して東京大学医学部に進み、卒業後のドイツ留学を経て、母校の医学部教授にまで立身出世した。その良精は、伯父の虎三郎の象山塾時代の畏友で、彼が大学進学前から医学者になるまで経済援助をした恩人(信州松本藩の象山門人小松彰)の姪(実妹の娘)と結婚する。だが、彼女は、新婚早々に病死、後妻に迎えたのが東京大学医学部の後輩である森鷗外の妹・喜美子であった。そして、良精と喜美子の間に生まれた娘(精子)の嫁ぎ先が、星製薬や星薬科大学の創設者である星^{ほしはじめ}一であった。そして、両者の長男として生まれたのが作家の星新一であった。したがって新一は、虎三郎の甥の孫、森鷗外の姪の子ということになり、何と「米百俵」の主人公である虎三郎は、文豪の森鷗外と縁戚に連なっていたのである。

(49) 同上『祖父・小金井良精の記』、69頁。

(50) 同上『祖父・小金井良精の記』、25頁。

あとがき

昨年来、世界も日本も未曾有の経済恐慌に翻弄されているが、大学の世界も例外ではない。わが住む信州大学も、国立大学法人化以来、文科省から予算の削減を強いられ、経済効率を求める改革の荒波に揺れている。管理職の末端に組み込まれた筆者は、会議と報告書に追われる日々の中で、思索は分断され、研究室で研究論文の執筆に取り組む安寧の時間など、望むべくもない。歌を忘れたカナリヤは、実に憐れで虚しい。そんな中で、本年度も何とか『研究報告書』（通巻第9号）を刊行することができた。原稿自体は、すでに昨年中に出来上がっていた。が、最後の推敲をする時間的な余裕がなかった。

本号に収載した論文は、「病翁小林虎三郎の病気と病状の分析—日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（IV）—」である。美談「米百俵」の主人公である象山門人の小林虎三郎は、幼くして難病の「天然痘」に見舞われ、一命は取り留めたものの、過酷な後遺症（左眼の失明と顔面の痘痕）を背負って生きなければならなかった。しかも20代の半ばには、幼少時にかかった難病が病因と思われるが、慢性リウマチや肝硬変などの難病を相次いで併発した。当時の医学のレベルでは、快復する見込みは全く見込めなかった。彼は、心身両面での耐え難い苦痛の病軀を背負って、幕末維新期の後半生を生きなければならなかったのである。

本論文は、40代半ばにして自らを「病翁」と称し、日本の近代化に関わる様々な研究的業績を残して天命を全うした主人公の、闘病生活の実態を明らかにしたものである。これまで、主人公である虎三郎が持病に苦しんでいたことは知られていた。だが、どのような病気や病状であったのか、は全く不明であった。彼の後半生は、不治の病との闘病生活の中での国家的活動の展開であった。厳しい病苦に苛まれながら、様々な活動を積極果敢に展開した彼の精神力と使命感は、尋常ではなかった。この厳粛な事実を抜きにして、日本近代化と共に生きた彼の教育的軌跡の全体像を理解することはできない。そう考えて、本論文を執筆した次第である。

私事に亘って恐縮であるが、昨年3月に親代わりの姉が急逝し、その悲しみが癒えない本年の正月、他界した姉の長女が、何と姉と同じ病気で急逝した。享年34である。姉の家に居候して学生時代を過ごした筆者にとって、妹のように愛おしい姪であった。相次ぐ身内の不幸は、還暦を過ぎた筆者には、心身共に応える悲しみである。公私共にままた

らない過酷な状況の中で、何とか本年度も研究報告書を刊行することができた。これは、何よりも筆者自身の研究的人生の再起への希望となった。昨年の前号に続き、実に思い出深い一冊となった。御高覧いただければ幸甚に存じます。

平成21年10月27日

信州大学の研究室にて 坂本保富